

天野秋一さんのお話

私は1940（昭和15）年6月27日に全生園に入所しました。17歳で入所してからどこにも行っていないので、現在まで66年間ここにいます。

全生園ができたのは明治42年8月29日で、初めのころは何もありませんでした。病気になるのは貧しい農家の子どもでした。そんな子どもたちに対する職員の横暴があり、子どもたちに読み・書き・そろばんを教えなければならないということで、入所者で静岡から教職員の経験のある人が園長として迎えられて寺子屋ができました。そこでは19～20歳の子どもたちが勉強していましたが、子どもを家に置いて入所した文盲の母親が、子どもと手紙のやりとりをしたいということで、20～30歳くらいの女性も通っていました。貧しい学校で小遣いがないため、園内作業でお金をもらって文房具などを買っていました。その当時は80名いて、女子が34、5名、男子が45、6名でした。子どもは12畳に8人で、1舎に4部屋ありました。男性たちは4部屋ある舎と2部屋続きの部屋がある舎にいました。

寺子屋で教えているのは高等教育を受けた人で、医者も時には授業をしていました。ですから、満足な教育ではありませんでした。場所は寺の片隅を借りていたので、園内で葬式や名士の講演がある時には休みでしたが、名士の講演には行かなければならなかったもので、その日は出席になりました。

昭和6年、全生園高等小学校ができました。教科書は園で買ってくれなかったもので、職員が書店で買い求めました。そのため全部は揃わず、子どもたちは退院して外へ出る希望がなかったからよかったけれど、例えば1年生の教科書がたくさん手に入った時には、それを2、3年生も使ったりしました。

昭和27年、「らい予防法」改正の問題が起こった時、抗議運動をしましたが、光田健輔、林芳信、宮崎松記が国会証言して、光田イズムの浸透が図られました。「患者は外に出すことはならん、手錠を掛けてでも入所させよ」という発言によって、法はますます強化へと進んでいきました。

選挙権は昭和22年に与えられましたが、義務教育の義務はありませんでした。その頃、学園に通っていた人で大きな会社の試験を受けて合格した人がいましたが、卒業証明書が必要なため出してほしいと頼みましたが無理でした。そのことを機に、義務教育の義務を与えてほしいという要望を国会に出しました。その結果、義務を与える代わりに教育は各園でやりなさい、ということになり、先生が派遣されて来ました。昭和28年（1953）9月28日、小学生6名、中学生9名の15名に一人ずつの先生が派遣され、11月1日に東村山小学校分校となりました。その後、中学生9名に一人の教師ではどうもならない、先生を増やしてほしい、と厚生省に要望したところ、小・中学校にもう一人ずつ増員されることになりました。その先生は産休代用の先生で、全生園で勤務すれば正式採用にすることでした。

私は、昭和36年に勤めてくれと頼まれて中学校の教師になり、昭和54年、最後の一人が卒業するまで勤めました。その時は高校はありましたが、小・中学校はなくなりました。プロミンのおかげで子どもたちは治っていきました。現在、私の教え子は全生園に一人いますが、それ以外には松丘保養所に夫婦とも教え子という人たちがいます。全生園には、沖縄、青森、東北など各地から子どもたちが集められ、それぞれ卒業していきました。

中学校教師として入った時、子どもたちをどうやって遊ばせるか、ということを考えました。子どもたちは家に帰れません。夏休みは、園内の森でテントを張って林間学校を開きました。そして園に、他の園で遊ばせてもらえないか、と要望し、長島、草津、駿河といった宿泊所がある園へ出かけました。また、この近くで林間学校ができないかと考え、あまり人の来ない渓谷に行きました。修学旅行も交渉し、宿泊する施設があれば許可すると言われました。そこで、昭和44年（1969）の第一回の時には、YWCAの「交流（むすみ）の家」に泊まって、奈良、京都を見学しました。しかし、2泊3日以上は認めさせることはできませんでした。2年目は、大阪万博の近くの駅に学生の宿舎があり、そこに泊まりました。学生は万博のコンパニオンをしており、「休みだから案内してあげましょう」とその学生のおかげで全て見る事ができました。その次の年は、3年生がいなかったではありませんでした。修学旅行に行った学生は、多くて4～5人でした。北へ行った時は、仙台の東北新生園に泊まって、中尊寺、松島、仙台城を車で回った後、青森へ行き、待っていた車で松丘保養園に行きました。新良田教室を卒業して帰っていた藤崎さんが、十和田湖を案内してくれ、その夜、夜行に乗って東京へ帰りました。それから2、3年はなく、昭和53年には3年生が一人しかいなかったもので、派遣教師の車に乗せて行くということになり、長野、富山に行きました。

その頃は、生徒は病気といっても一般の人と変わらない状態だったので、先生が責任をとるならということで、園も寛大になっていました。所沢から来ていた先生が、畑があるからと、その実家で農業実習をすることになり、秋に自転車で行ってさつまいもなどを作りました。その次の年に先生が辞めたので、場所がなくなりましたが、2中のPTAの方が正門のすぐ前にある畑を貸してくれました。

私が全生園に来た時は、周りには家がなく、藁葺き屋根の「いっこく屋」（なんでも屋）しかありませんでした。南は水道通りで、大八車が通るほどの道（今のバス道）は東村山に行く道で、久米川へはあぜ道しかありませんでした。穀物や肥料などが東村山駅に着くと、駅止めとなり荷物を取りに行かなければなりませんでした。昭和16年、戦争のために職員が手薄になり、園の手助けをして荷物を受け取りに行くため、若い者を5、6人集めてくれということで、公に外へ出ていました。便利屋のようなものでした。駐在所の前で休んでいると、おまわり「何をしているのか？」と聞かれることもありました。

戦時中は、外に買い出しに行っていました。園の巡回は2時間ごとなので、監督を見つけ時間をねらって出ていました。買い出し部隊はよく捕まっていたのですが、園内は塩不足で、正式には手に入らないので、塩を持っていると捕まりませんでした。

その頃、栄養失調で亡くなる人が多かったのですが、園長は絶対に言いませんでした。一日に5～6人、月に20～30人亡くなるものがざらにありました。亡くなったら、野辺送り、火葬といったことを全てしなければなりませんでした。火葬場の釜が冷めることがなかったくらいでした。入所した頃は60歳くらいの入所者を見ると、「長生きしたなあ」と思っていました。今は女性で100歳以上、男性でも96歳の人がいて、亡くなる人も少なくなってきました。

園からの外出はありましたが、親が亡くなった時には否応なく外出させました。それで、ある人は親を何回も殺しました。らい菌が出ていたら外出させてくれませんでした。

（森元美代治さん）

予備校に通っていた頃（昭和36年）、私は要領が悪いので池袋で3回捕まりました。園内では戦前、うどん縞の着物を着せられていたので、中に洋服を着て、外に出る時に靴を履き、残っている人に脱いだ着物とげたを預けました。そして帰って来た時には、その着物と下駄を渡してもらって着ました。

園は厳しかったので、自殺者が多かったです。首を吊る人が多く、昭和17年には16人も出ました。朝起きたら、第3隔離病棟の側の桜の木に、女の人がぶら下がっていました。また、鐘つき堂でも一人、首を吊りました。昔の建物ではほとんどそういった事故がありました。昭和18年に、アメリカでプロミンができましたが、日本は戦時中だったので入って来ませんでした。昭和25年（1959）にプロミンは予算化され、病気が治るようになりました。

（佐久間）

寺子屋は、職員の横暴に対抗して作られたものですか？

（天野さん）

入所者たちは四人から一等下の扱いを受けており、手紙や小包の中身を調べられました。親から「お金を入れたから大事に使え」と来ても、お金がなくなっていたり、手紙が来たとき喜んで、字が読めないため職員にごまかされたりしました。真面目にお金が入っていたら申告すると、お金を換えられました。全生園で作った通帳には、お金を入れても利息は全然付きません。ある人は、通帳からお金を出そうとしたらお金がなく、職員がヒマラヤ衫を買うためのお金に使っていたことがありました。その職員は、それが不正事件として発覚しクビになりました。

昭和6年に建物ができ、それらは公費で建てられましたが、建物によっては三井、日赤、静友などからの寄付金で建てたという話もあります。子ども舎は舞踏家の藤蔭静枝から藤蔭寮、青年舎は祥風寮と名前が付いています。

以前は藤棚はなく、グラウンドで野球ができました。最後の生徒であったまさとくんは、4人兄弟のうち姉と本人が入所し、弟二人は健康でした。弟の一人は卒業後、名古屋の工業高校に行きました。この前、この部屋で昭和40～54年までの教え子と同窓会をしました。子どもを連れてきた人もいました。九州の五島列島、秋田、草津、東北新生園から集まって来ました。当時はそれぞれに学校があったのがなくなったので、みんな全生園に来ました。新良田教室を作る時、東京から地方へ行ったのは、光田が東京で作ると患者運動をするし、自由に出入りされると困るということで長島に作りました。厚生省が、瀬戸内の3園で日本の3分の1を占めるから決めたのではないかと、ということもあります。

（森元さん）

長島に行く時は、貨車に20、30人が乗せられガラガラだったので、一般の人が乗ろうとしました。両側から鍵をかけ、貼り紙をされました。全生園では連れて行った職員が握手した時、分け隔てがなかったのに、愛生園の職員は一步下がったのにはビックリしました。愛生園では一週間消毒され、風呂の中にも消毒液が入っていました。

全生園では職員室に自由に入っていたのに、新良田教室では入れなかったのにはビックリしました。子どもがノートを買って来てと言った時、お金をつまんで消毒して窓に貼っていたのを見ました。それからは口をききませんでした。

当時の林園長は、言っていることとやるのが違っていました。

内科の北田先生は、いとこが中学校の先生で、いつも背広を着ていたの、「なぜ白衣を着ないのか？」と尋ねたことがあります。

（天野さん）

中学校では、私服のまま仕事をしていました。生徒がコーヒーを作って、「先生、飲まない？」と言ったり、先生が職員室に入って来るより前に、生徒が職員室に入って来たこともありました。

神社や仏閣を見学する時は、先生がついていればOKで、自由に出ていました。関東からこちらには、入所者と先生の境があまり厳しくありませんでした。

園長が見学者を連れて来て、見せていたこともありました。戦前は、新患は礼拝室に集められて、外からの参観がありました。

全生学園時代、各園にあった学校が公立になっていったのには、園と園とのつながりがなかったのばらつきがありました。東北新生園は早かったです。

園では人権が剥奪されており、憲法より「らい予防法」が優先されていました。東村山市から先生が派遣されましたが、学校運営は園でした。厚生省、国会に学校設立願いを出し、支援してくれた国会議員もいましたが、全生園が一番遅かったのは園が必要と認めず、動かなかったからです。昭和30年に増員をお願いした時は運良く増員できましたが、その時に来た青山先生は、化成小学校から派遣されて来た人で、足立区の先生が20、30人来た時に同僚でした。2年間おられました、3年目に来た鈴木先生は長くおられました。全生園に4年間勤めれば正式採用になれるというのがあり、中学校で3年間勤めた先生がいましたが、あと1年がまんすれば正式採用になるというところで結婚退職をしました。その後、移動してくる人がいなかったの、校長が娘を呼び、親子で先生をしていました。その先生は、ここに来て初めて、自分の兄が入所していることを知りました。

鈴木敏子先生は、バレーボールをした後消毒をしていました。

村上詞郎先生は自由画展の会員で、望郷の丘にピーナス像を制作されました。鈴木先生のようなことはされませんでした。

中学校の安田先生は、航空ショーの時、車で何度ももたって生徒を送迎してくれました。帰りは自分の家に連れて行ってくれました。又、立山の別荘に泊めてくれたりもしました。長島の新良田教室を卒業した生徒が、先生になって園の学校の先生として勤めていましたが、園内（患者）作業の一つなので給料が少なく、自治会に言ってもはねつけられました。外から来る教師は、教育委員会から給料をもらっていました。

厚生省の高山事務部長は、入所者にとってもよくしてくれました。ヒイラギの垣根を刈り込んで低くしたり、競輪場から「患者が来ているから何とかしてくれ」という電話が来た時、「この人たちはうつらないから、うつような人ではないから大丈夫だから」と答えたり、入所者が「暖房がないから、職員に一人一つずつカイロを持ってと言われている」と言ったら、「職員のストーブを持って来なさい。子どもたちは寒い中勉強するんだから、職員はカイロでよい」と言ってくれたりしました。要望に対して必要と認めたら、実行も早かったです。厚生省では評判が悪く、一目置かれていたようです。また、スポーツが好きで、スポーツの優秀な人を全生園に集めたり、職員に採用したりしていました。いいことはいい、悪いことは悪いとはっきりした人でした。現職のまま、脳溢血で亡くなりました。

（森元さん）

高校卒業後、「園の規則を守ります」という誓約書を書かされました。

（天野さん）

初めは、理数、書道を教えていましたが、普通のカリキュラムをしていると追いつかないから、実力をつけるために、子どもたちに代わりばんこに先生をやらせていました。授業の前はどこをするかを言っておくと、その子は勉強しなければならないので一生懸命勉強していました。

（森元さん）

他の少年少女寮の子どもたちは、退所後再発する人が多かったのですが、全生園の少年少女寮にいた子どもたちは、世話をする人たちがきちんとしていたので再発していません。そして、礼儀もきちんとしており、人間的にも性格的にもよかったです。

（天野さん）

困ったのは、本校との付き合いです。全生園の生徒は勉強がよくできるのに、内申書を本校へ出すと1、2がついてきました。「なぜ？」と本校に尋ねると、「本校の生徒の成績が下がるから」と言われました。本校での評価が低く、全生園の生徒は進学校に行くことはないから、内申を本校の生徒にとられていました。

学校が廃止になる前に、「重要なものだから保管しておいてくれ」と言っておいた記録（成績表、住所録、学籍簿、卒業生の進路）がなくなりました。それだけでなく、顕微鏡、世界・日本文学全集、百科事典もなくなり、天体望遠鏡は職員にとられました。地図も一本もありません。

（江連）

いい思い出と言えばどんなことですか？

（天野さん）

男子寮で月に1回、ジンギスカン鍋をしていて、そこに若竹寮のお父さんが青年も連れて来て、一晩中鍋をつついて大騒ぎしていました。女子寮では、ひなまつりの日などにごちそうをしていました。

一中の泉校長が来て、書に取り組んでいた時もあり、『多磨』の表紙を書いている谷田部さんは、その時に書を習いました。

親が、子どもたちに面会に来ることはありません。

小2の頃に入所した子が、全生園の自由な教育を受けて引込み思案でなくなり、千葉に帰ったら活発になっていたの、教師がどうしてこんなに変わったのかと言っていたこともありました。

（森元さん）

全生園の少年・少女寮の寮父・寮母さんや天野先生はすばらしかったです。女の先生はボタン付けや洋裁、料理を、男の先生は国語や社会を教えて下さり、自分の子どものように接してくれました。中でも、基本的な生活習慣をつけさせ、治療をきちんとさせ、夜は外出をしてはいけないなど、子どもたちを大事にしてくれました。

奄美和光園は、昭和28年、日本に復帰した年に分校となりましたが、寮父・寮母は自治会が選んでいました。全生園の寮父・寮母さんのように子どもたちを見ることはなく、大人と同じように自分で判断していたので、適当な治療を受けると後遺症が残りました。

（天野さん）

寮父・寮母は自分の責任でやっていたので、なかなか替わることはありませんでした。後に、女子寮は替わりましたが。

夜中に石道を下駄で歩く音がするので見ると、いないことがありました。現在の松の木の所が墓地で、人を埋めた後に松を植えました。

派遣された教師との溝はありませんでした。派遣の先生は、授業が終わって一時間すると帰って行きました。

（森元さん）

私は一年半くらい英語を教えました。ABCくらいしか分からないと言ったら、ABCも分からないから教えてと言われたので受けました。派遣教師と同じ時間くらいの仕事をしていました。「補助教師」でしたが、対等にしていました。教育委員会からは認められていませんでしたが、後にもらった感謝状には「補助教師」とは書かれていませんでした。

外部からの先生もいて、早稲田大の講師の玉井先生が週に1回来ていました。

月曜に職員会議があって、毎日8時半から職員朝礼、当直もありました。足りない所を補うのが「補助教師」でした。

（天野さん）

奄美の人で西部軍指令部にいた、たけむにしという先生がいました。この先生は、英語の先生が休んだら英語、理科が休んだら理科、と何でもやる人でした。傷がもとで、脳毒症で亡くなりましたが、亡くなった時、給料に手をつけていませんでした。

（森元さん）

日本がアメリカ占領下におかれた時、カトリックを入れました。

（天野さん）

永上（恵介）さんは、戦後に中学校で国語を教えていました。同じ年の藤田四郎さんは、一回辞めた後、もう一度やりました。

戦後は、教科書を使って教えていました。教室に何時間も閉じこめていたので、息抜きをさせたりしました。

（森元さん）

少年・少女寮で一日中遊んでいました。

（天野さん）

戦中には、岐阜県のおまわりさんだった牧田さんという人もいました。

（文責 岡村道子）